

蓮如と真宗行事

西山 郷史著

この本は、真宗の僧りよであり民俗学徒であり、そして何よりの能登に生まれ、能登の風光のなかで生きてきた著者の、郷土に寄せる熱烈な愛情の手紙である。

評者は今年の六月、真宗独特の説教として知られる節談を、

著者の西山氏

とともに能登

門前町のさる

能登に寄せる愛

寺院で聞く機会があった。その

前二月には、本書にもたびたび

登場する珠洲市の西勝寺(著者

が副住職を務める寺でもある)の

春勸化(がんげ)に出席させ

てもらったこともできた。

この二度の機会を通して何よ

りも印象的だったのは、真宗の

門信徒の人びとの生活のなか

で、真宗の教えがいかに深いと

ころに息づいているかという点

にあった。あの時あの本堂にた

ちこめていた熱気こそが、かの

一向一揆を生み出したのではな

かったろうか。それを肌で感じ

ることができたのは、感動的な

体験でさえあった。

本書で扱われる内容は多岐に

わたる。とりわけ北陸は蓮如伝

他の土地でなら、弘法大師に

ことよせて語られるような内容

といえよう。柳田国男ならばこ

れを、蓮如もまた旅をする神の

子(大子・ダイシニ・大師)にほ

かならず、神の御子(みこ)に

対する恐れと尊敬とがこうした

伝説を生み出したのだ、と説明

するところだ。

しかし著者は

この話をむしろ

次のように読むべきだという。

「たしかに不思議なことだ。だ

が、我々悪人が弥陀を頼む一念

で、救われることに比べたら何

ほどのことがある」と。西山

氏が柳田の視点を今、ひとつ乗

り越えた確かな手ごたえがこ

にある。

(木耳社、一七〇〇円)

◆評・真野俊和・上越教育大

助教授)